

大問一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

オノマトペの定義

オノマトペの例は日本語 ^a ワシヤ ならすぐに思いつくだろう。（ⁱ）、以下のダイアローグの中で、オノマトペはどれだろうか？

A ご飯さあ、食べてね。

B ああ、ありがと。

A こんなに食べられない。

B これ、おれ、もうちょっとイメージ的にはこう、このぐつぐつしとるのかと思っただけ、なんか、なんか（笑）、なよつとした感じで。

A （笑）うん、ある意味、べ、べ、べちよつていう。

B もっとジュージャーいって出てくる。

（名大会話コーパス）

このダイアローグで使われたオノマトペは、（ⁱⁱ）「ぐつぐつ」「なよつ」「べちよ」「ジュージャー」の四つ。必ずしも辞書どおりのオノマトペの使い方ではない。「なよつ」は通常、人が弱々しくて頼りない様子を表すし、「ジュージャー」に至ってはその場限りで作られた語である。（ⁱⁱⁱ）、日本語を母語とする人なら、これらのオノマトペは、感覚的に意味がわかり、このダイアローグの光景が ^b 鮮明 にイメージできるのではないだろうか。（^{iv}）、これがハンバーグの話であることまで想像できたという読者もいるかもしれない。私たちはこれほどオノマトペを熟知している。

しかし「オノマトペとは何か」を定義しようとすると、これがかなり難しい。これまで何人もの言語学者がこれに取り組んできたが、なかなか納得する定義には至っていない。オノマトペの特徴として（^v）思いつくのは、繰り返しの ^c 語形 である。重複形と呼ばれる。「ぐつぐつ」「ブラブラ」「キラキラ」「ホカホカ」「ポンポン」など、重複形のオノマトペはいくらでも挙げることができる。また、重複形のオノマトペは他言語にも多く、バスク語で「グルカグルカ」といえば「ゴクゴク」を、南米のバスタサ・ケチュア語で「アキアキアキアキ」といえば、「ユラユラ」に似た前後の揺れを表す。しかし、「なよつ」「べちよつ」、さらに西アフリカのエウェ語で「ザラザラ」を表す「ツアクリー」は（¹）。「オノマトペ」重複形のことば」というわけではないようだ。

現在、世界のオノマトペを大まかに捉える定義としては、オランダの言語学者マーク・デインゲマンセによる以下の定義が広く受け入れられている。

オノマトペ…感覚イメージを写し取る、特徴的な形式を持ち、新たに作り出せる語

かなり抽象的な定義である。「特徴的な形式を持つ」という点は、オノマトペに重複形が多いことから納得できそうである。「新たに作り出せる」という点も、先の「ジュージャー」のような例から明らかだろう。①では、「感覚イメージ」を「写し取る」とはどのようなことを意味するのだろうか？

感覚イメージを表すことば？

まず、オノマトペは感覚を表すことばかどうかを考えよう。一般に、「感覚を表す」ことばとして真つ先に挙げられるのは(2)である。日本語の形容動詞も含む。「うるさい」「静かな」「甲高い」は(2)、「大きい」「鮮やかな」「赤い」は視覚、「滑らかな」「熱い」「重い」は(3)、「酸っぱい」「甘い」「しょっぱい」は味覚、「くさい」「芳ばしい」は(4)といった具合に、(3)の多くは感覚特徴を表す。

一方で、感覚と強く関わる(4)というと、「聞く」「見る」「感じる」「味わう」「嗅ぐ」あたりである。(5)なら、「音」「外見」「手触り」「味」「匂い」などであろうか。「走る」「食べる」「吠える」「知る」などの(6)は、五感のどれに関わるかというよりも、どんな出来事かを「ジクにしたことばである。「ネコ」「空気」「夢」「昨日」などの(7)も、どの感覚のことばかというよりは、対象がどんなものかに関心を持つことばである。

では、オノマトペはどうだろう？ いわゆる(8)は、「ニャー」「パリーン」「カチヤカチャ」のように(5)情報を中心に表す。(9)の中には、「ザラザラ」「ヌルツ」「チクリ」のように(6)情報を表していると思えるものもあれば、「スラリ」「ウネウネ」「ピョン」のように(7)情報に注目しているものもある。さらに、(10)と呼ばれるオノマトペは、「ゾクツ」「ドキドキ」「ガツカリ」のように第六感とでもいうべき(8)感覚や(9)経験を表す。

多くの(11)と同様、オノマトペは感覚のことばなのである。たとえば、「正義」「愛」「迷惑」といった(12)は特定の感覚によらない意味を表す。一方、これらの意味を表すオノマトペというのは、日本語でも他言語でもなかなか見つからない。これらの概念は、音で真似るには抽象的すぎるのであろう(オノマトペで表しやすい概念と表しにくい概念については、第5章で紹介する)。(13)ならば、「正しい」「愛おしい」「迷惑な」のような語でこれらの概念を表すことができる。その意味で、オノマトペは形容詞よりもさらに感覚を中心に据えたことばと言えるかもしれない。

(今井むつみ 秋田喜美『言語の本質』)

問い一 傍線部 a ｓ d それぞれについて、カタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問い二 (i) ｓ (v) に当てはまる語として最も適切なものをそれぞれ次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア それにもかかわらず

イ たとえば

ウ 少なくとも

エ すぐに

オ もしかしたら

問い三 (1) に当てはまることばとして最も適切なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 繰り返された

イ 繰り返している

ウ 繰り返されていない

エ 繰り返そうとしている

オ 繰り返されている

問い四 傍線部①では、「感覚イメージ」を「写し取る」とはどのようなことを意味するのだろうか？とあるが、オノマトペが「感覚イメージ」を「写し取る」とは、どういうことか。「ｓだということである。」に続くように本文中から二十七字で書き抜きなさい。

問い五 (2) ｓ (13) に当てはまる語として最も適切なものをそれぞれ次のア～カから一つ選び、記号で答えなさい。なお、同じ選択肢を複数回、用いてもよい。

ア 動詞

イ 擬音語

ウ 形容詞

エ 擬態語

オ 名詞

カ 擬情語

問い六 (2) (9) に当てはまる語として最も適切なものをそれぞれ次のア～カから一つ選び、記号で答えなさい。なお、同じ選択肢を複数回、用いてもよい。

- ア 身体
- イ 触覚
- ウ 聴覚
- エ 心的
- オ 嗅覚
- カ 視覚

問い七 本文には、次の文が抜けている。この文が入る適切な箇所の直前の文の終わりの九字を書き抜きなさい。なお、句点も一字に含める。

このことは、感覚的でない意味を表すオノマトペが想像しがたいことからわかる。

大問二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

十九世紀末ロシアの十年間に(三)四年のプラス・マイナスはありますが)何人もの天才が生まれています。ノーベル賞の受賞者という意味ではありません。彼らの中にノーベル賞者は一人もいませんでしたから「単なる天才たち」でしょうけれど、そのような人々が相次いで世に出たことに驚きを禁じえません。その理由について何か合理的な説明をしようとしてもなかなかうまくいかないのですが、たぶん、こういう風に言うことはできるでしょう。帝政ロシアの空気には何か批判的なものが立ち込めていて、ドストエフスキーやトルストイやチェーホフを読み、ムソルグスキーやチャイコフスキーを聴き、ソロビヨフやセーチェノフやメンデレーエフの講義を受け、雑誌『祖国公論』や『ロシア報知』を購読していた、ごく平凡な親たちに、ごく平凡な子どもが生まれてくるばかりではなかったのでしょうか。たとえばそれが千人に一人、百万人に一人の割合であるにしても、です。

(イーゴリ・レイフ(著)広瀬信雄(訳)、

天才心理学者ヴィゴツキーの思想と運命、ミネルヴァ書房)

※設問のために一部改変

問い 本文に続くように、次のアゝ力を並び替え、適切な文章にしない。

ア

文学ではブルガーコフとパステルナーク、アフマトワとマンデリシュタム、ツヴェターエワとマヤコフスキーがいます。また音楽ではセルгей・プロコフィエフ。物理学ではピョートル・カピツァ、イーゴリ・タム、そして膨張する宇宙理論の生みの親アレクサンドル・フリードマン。生物学ではニコライ・ヴァヴィロフとティモフエーエフ・レソフスキー、そしてロシアの太陽生物学の創始者アレクサンドル・チジョフスキー。生理学では人間と動物の行動構造理論の著者ニコライ・ベルンシュテイン。そして心理学では……。

イ

実際、この天才たちの創造が成熟していったのは、ロシアにとって最もよい時代というわけではありませんでした（宇宙物理学者ゲオルギー・ガモフやテレビの発明者ヴラジミール・ズヴォルキンとは別にしておきましょう。この二人はロシアを出て行ったきり戻ることにはなかったのです）。つまり前記の天才たちのほとんどは大いに辛酸をなめた生涯を送ったのです。

ウ

まあ、こういうことはロシアの歴史ではよくあることなのですが、ヴィゴツキーについての承認や称賛はソビエト時代のロシアでは行なわれず（ほんの一握りの弟子や後継者は別にして）、その一方で外国においては、彼の著書『思考と言語』はまず英語と日本語に翻訳され、その後その他の多くの言語に訳されました。「ランゲージとスピーチに関する彼の著作を自分のために見つけてから、私は三日間眠りませんでした。」とヴィゴツキーの未亡人宛てに送った手紙の中でそう告白しているのは、ロンドンの大学の同僚バジル・バーンスタインですが、さらにこう述べています。「私はロシア学派、とりわけヴィゴツキーの伝統に基づいた研究に借りものをしています……」。またシカゴ大学時代のステイーヴン・トゥールミンは、ヴィゴツキーをあのもーツァルトと比べようとしています（彼は『ニューヨーク・レビュー』誌に掲載された論文でヴィゴツキーを「心理学のもーツァルト」と呼んでいます）。

エ

そして、このモーツァルト肌の天才が、天から委ねられた境界を踏み越えるべきではないということがもし正しいとすれば、ヴィゴツキーは自分の人生すべてと運命をもって、このロマンティックなプロクルステスの寝台にこれ以上なくうまく収まったのです。つまり、ほんの十年間に集中的な研究活動をし（約百五十の論文・著書、記事を著しました）、その創造的な力がまさに開花した時期に結核によって早すぎる死を迎えました。最高峰の著作とも言うべき彼の最後の『思考と言語』には、子ども一人ひとりに人間としての意識が誕生する秘密がきわめて鮮やかに解明されているのですが、それを彼自身は印刷された書物として見ることはできなかったのです。死後二十五年間も、出版に対しては完全な無視と沈黙が続いていました。ヴィゴツキーの研究を引き合いに出すことは厳しく禁じられていたのです。当時、心理学部の学生であった彼の娘ギータは、床下にこっそり隠してあった父の書物を同級生たちに手渡しました。西側の学界が彼の名前を知らなかったのも驚くに値しません（植物学の探検家ニコライ・ヴァヴィーロフとは違っていますね）。実際のところ少なくとも一九六二年までヴィゴツキーは何も知られていませんでした。でもロシアの私たちのところでは彼の名前は伝説になっていたのです。

オ

でもレフ・セミョーノヴィチ・ヴィゴツキーの娘たちが自分の父親に対するこのような評価をやっと耳にすることができたのは、父の死後何年も経ってからのことでした。しかもそれはヴィゴツキーの同僚であるアメリカ人研究者の次のようなことばからでした。「あなたのお父様が私たちにとって神様であるということは、ご存知でいらっしやいますよね。」と、モスクワを訪問したコーネル大学教授U・ブロンフエンブレナー教授は、やや戸惑い気味の訪問相手の女性に向かっていきなりそう告げたのでした。

カ

ああ、このような称賛のせめて一部でもレフ・セミョーノヴィチ・ヴィゴツキー本人のもとに届いていたなら、彼はもう少しは長生きできたかもしれません……。

ラファエロもプーシキンも

ロルカもマヤコフスキーも

天才たちは、三十七歳。

*「訳注」ギリシャ神話。強盗プロクルステスは、捕えた人を寝台に寝かせ、寝台よりも長いものは、はみでた部分を切り落とし、短い者は引っ張って無理に引き伸ばしました。